

(続紙1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	足立 真理
論文題目	現代インドネシアにおけるザカート (喜捨) 制度の革新とイスラーム的 社会福祉		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、ムスリムの最重要義務行為の1つであり、イスラーム世界で長らく用いられてきた伝統的社会経済制度であるザカート (喜捨) を取り上げ、近年、東南アジアで取り組みが始まっているその新たな実践に着目したものである。とりわけ、先進的な取り組みが始まっているインドネシアの事例を取り上げ、その実態の解明とイスラーム経済論から見た意義を明らかにし、新たな社会福祉システムとしての可能性を考察することをめざした研究である。</p> <p>本論文は、5章から成り、序論と結論が付されている。</p> <p>第1章「イスラームにおけるザカート—社会・経済・政治—」では、関連する様々な研究領域 (貧困・社会発展論、イスラーム法学、イスラーム経済学) の先行研究を批判的にまとめ、ザカートを慈善の観点から捉えるこれまでの分析枠組みの限界を示し、ザカートの持つ社会福祉的側面に注目する新しい分析枠組みが提起されている。</p> <p>第2章「インドネシアにおけるザカートの歴史的位相」では、現代インドネシアにおけるザカートの沿革がまとめられている。そこでは、長らく個人の実践であったザカートが、イスラーム復興の盛り上がりとともに代替的社会福祉制度として注目が高まっていき、1990年代後半の民主化以降、国家による制度化が進んでいく動態およびそれに対するインドネシア社会の様々な対応 (コンフリクト、コーディネーション) が明らかにされている。</p> <p>第3章「イスラーム経済思想、実践の合流地点—インドネシア・ムスリム知識人のザカート議論—」では、インドネシアで現在実践されているザカートの先進的取り組みの理論的バックボーンとなったムスリム知識人たちの議論に焦点を当て、ザカートを社会における富の再分配装置として再定義したり、生産的ザカートという新概念を創出したりするような理論的・制度的革新がその先進的取り組みの背景にあることが解明されている。また、その革新の過程で議論されたイスラーム的な倫理、イスラーム的な社会的公正といった基礎概念の再検討は、イスラーム世界全体の思想潮流とも通底していることが明らかにされている。</p> <p>第4章「インドネシアにおけるザカート分配のパラダイム転換—伝統から創造へ—」では、ジャワ島東部のマラン市における臨地研究にもとづいたザカート実践の実態解明が行われている。そこでは、集められたザカートの用途について、従来から行われている貧者・困窮者等への直接的給付だけではなく、マクロ経済レベルでの貧困の削減や社会福祉の向上を目的とした教育や医療分野への投資 (奨学金給付や病院の建設</p>			

など)にも新たにザカートが用いられていることが明らかにされ、こうした変容を伝統的ザカート分配から創造的ザカート分配へのパラダイム転換と位置づけている。

第5章「インドネシアにおけるザカート分配のパラダイム転換—消費から生産へ—」では、前章と同じくマラン市における現地調査にもとづいて、ザカートをマイクロファイナンスとして活用する新たな取り組みが明らかにされている。そこでは、従来ザカートの支給対象ではなかった中間層の人々が、マイクロファイナンスという形でザカート資金を事業等に利用していることが具体的調査データによって解明されている。

結論では、論文全体をまとめ、インドネシアにおけるザカートの実践が、国家に依らない新たな社会福祉システムとして機能し始めていることを指摘し、それが単にインドネシアの文脈だけでなく、イスラームの理念にもとづいた新たな社会福祉システムのグローバルな先進事例としての意義もあると総括されている。